

# jdzb echo

## EU議長国ドイツと日本—日EU関係の画定的な時期となるか

ハンス=ヨアヒム・デア (Dr. Hans-Joachim Daerr) 駐日ドイツ連邦共和国大使

ドイツが欧州連合 (EU) の議長国を務める2007年上半期は、日本とEUの関係について格別に期待のもてる時期である。

2007年上半期というと、ドイツがG8の議長国でもある時期と重なる。また6月初めにベルリンで開催される日EU定期首脳協議は、日欧間の緊密な協力関係をさらに整え、より広く知らせるための絶好の機会である。さらに、安倍総理就任後の東アジア以外で初の訪問、本年1月のベルリンとブリュッセルであったことも良い徴候である。

2007年上半期にはEU関連においてもG8関連においても、そしてまた日独の二国間関係においても歓迎すべ

き数多くの契機が重なるだけでなく、相乗効果を挙げるためのチャンスも得られる。また、2008年は日本がG8議長国となるため、G8に関しては継続性が確認されている。ドイツと日本との協力関係にかかわるさまざまな機会がこのように同時に訪れることは滅多にない。

もうひとつ幸運なことは、ローマ条約50周年記念がドイツがEU議長国の時期に当たったことである。日本のメディアが、EUの歴史と現在EUが担う役割についてこれほど詳細に、またきちんとした基礎の上に立ち、しかも肯定的なニュアンスで報道したことはかつて余り見受けられなかったことである。また、3月25日に安倍晋三首相

を主賓にお迎えして東京で開催したローマ条約50周年記念式典に参列された日本の要人の地位肩書きや人数も、日本においてEUがますます重視されるパートナーとして認知されるようになったことを示すものであった。

ドイツがEU議長国として日本でさまざまな事業を実施する際に、日独間の特別な関係が役立つことが多いが、これは日欧関係全般に関しても該当することである。

すなわち、ドイツと日本の間には全く問題が無いが、ドイツと日本が多く類似する問題を抱えていることが私たちの事業を実施しやすくしてくれるのである。国際的にみても社会政策的



(C) Presse- und Informationsamt der Bundesregierung 2007

### 目次

EU議長国ドイツ デアドイツ大使	1~2
編集部記	2
「生物多様性」とは何か ヘンネ氏インタビュー	3
『アジアのメガシティ』 大方教授報告	4
日独青少年交流 旅行記から	5
事業報告	6
2007年開催予定プロジェクト	7
『一般公開の日』	8

にみても、ドイツと日本は全く同じか、あるいは極めて似通った問題に直面している。ドイツ、日本、EUは「持続可能な発展」「自由」「グッドガバナンス」「人権」をグローバルに普及させることに積極的に取り組んできた。そしてまた、紛争克服と平和構築活動においては無くてはならないソフトパワーとしての役割を担ってきた。

ドイツ、日本、EUの政治レベルでの協力を強化するための優れた基盤が2001年に調印された日EUアクションプランである。以来政治レベルの交流と定期的な協議会から密なネットワークを築き、そこから徐々に具体的な協力活動が生まれるようになった。アフガニスタンと中央アジアにおける日本との協力を強化すべくドイツがEU諸国とともに努めていることも一例として挙げられる。

6月の日EU定期首脳協議では、「気候変動」「革新」「エネルギー」「知的所有権の保護」に加えて「国際的な危機克服」も中核的テーマとして取り上げる。自然保全および気候変動の問題は、日本の世論も多に関心を示すテーマである。当大使館に対してドイツの環境保全に関する情報を求める人も増えている。

日本ではまた、EUの今後の発展に対する関心も高い。EUは地域統合の成功事例として認識されている反面、ヨーロッパで問題視されるEU内の意見の対立や経済成長面での問題には余り関心が示されない。その結果、EUは南・東アジアの地域協力を強化するための手本として挙げられることが多い。EUを「アジアにおける地域協力の青写真」として気軽に利用できないことは言うまでもないが、実際に日本では欧州統合を「ビジョン豊かなアイデアを育むためのインスピレーションおよび激励」として用いている模様である。我々としても、欧州の経験を喜んで参考に供したいが、どの地域もそれぞれ固有で特別な条件からスタートしてそれぞれの道を探らなければならないことは、日本の友人諸氏もよく理解されていることである。

EUおよびEU加盟国に対する日本での理解を持続的に改善するためには、若手世代にEUを知ってもらわなければならない。そのための試みとして、EUの創設記念日である5月9日に、EUの国ぐにと在日EU委員会代表部が共同アクションを実施した。在日大使館を持つEU22か国の全駐日大使をはじめ50人以上の外交官が首都圏の77の中学校・高等学校に出向き、総計1万8000人以上の生徒にEUおよび各出身国に関する特別授業を行なったのである。

ドイツがEU議長国の任にある六ヶ月間で日本とEUの関係を抜本的に規定し直すことは不可能であり、またその必要もない。それでも、この六ヶ月間にはたくさんの手掛かりがあり、未だ残っていてもいる。これらを最大限に利用しない手はない。6月にベルリンで開催される日EU定期首脳協議から、国際的な重要課題をはじめとするさまざまな問題を解決するために日本とEUが真剣に力を合わせ、将来に向け一層緊密に協力する意志を持つというシグナルを発信することができたら、それこそが、画定的な時期の画定的なシグナルと言えよう。



ハンス＝ヨアヒム・デア (Dr. Hans-Joachim Daerr) 駐日ドイツ連邦共和国大使 (2006年7月着任)、ベルリン日独センター評議員

ベルリン日独センター広報紙『jdzb echo』の読者の皆様

いつも『jdzb echo』をご愛読いただき、ありがとうございます。本第79号より内容およびデザインを改訂しました。この『編集部記』で紙面についてご案内するとともに、『jdzb echo』読者の皆様に一層多くの情報をお届けすることができるよう努めて参ります。たとえば、ベルリン日独センターが企画実施する事業(学術会議、シンポジウム、文化事業等)のなかから、開催を間近に控えたものをいくつか選んでご紹介します。面白そうな企画だと感じられましたら、是非ベルリン日独センターの事業にご参加ください。もちろん、実施済み事業に関する報告も従来どおり掲載しますが、詳細な報告はリニューアルされたベルリン日独センター・ウェブサイトに譲り、『jdzb echo』では短縮版のみを掲載します。広報紙とともにウェブサイトも、あわせてご愛読いただければ幸いです。

巻頭寄稿文では、日独に関連する時宜的なテーマを取り上げるよう努めます。また、最終ページは、ひとつのテーマに絞ったページとします。本第79号では、恒例のベルリン日独センター『一般公開の日』を紹介いたします。6月23日に開催しますので、皆様奮ってご来場ください。この度の『jdzb echo』の改訂では、ベルリン日独センターが意図すること、計画することを皆様方により積極的にお伝えすることを目指しています。新しい『jdzb echo』が皆様方に受け入れられ、ひいてはより多くの方がたにベルリン日独センターの事業にご参加いただければ、まことに幸いです。

フリデリーケ・ボッセ  
ベルリン日独センター事務総長

#### jdzb echo

ベルリン日独センター広報紙は四半期毎(3月、6月、9月、12月)に刊行されます。

発行：ベルリン日独センター(JDZB)  
編集：ミヒヤエル・ニーマン  
E-Mail: mniemann@jdzb.de

本紙『jdzb echo』はPDF版をホームページからダウンロードすることも、eメールでの定期購読も可能です。

連絡先：  
Japanisch-Deutsches Zentrum Berlin (JDZB)  
Saargemünder Strasse 2, 14195 Berlin, Germany  
Tel.: +49-30-839 070 Fax: +49-30-839 07 220  
E-Mail: jdzb@jdzb.de, URL: http://www.jdzb.de

ベルリン日独センター図書室の開室時間は  
火曜日～木曜日午前10時～午後4時です。

友の会連絡先：freundeskreis@jdzb.de

気候変動は地球上の種の多様性に重大な影響を及ぼす！

ベルリン日独センターは東京大学21世紀COEプログラム『生物多様性・生態系再生研究拠点』とともに7月5日に日独シンポジウム『日本とヨーロッパにおける生物の多様性と持続可能な開発』を開催する。ドイツ連邦環境省の後援を得る本シンポジウムは、日独の専門家による一週間にわたる会議『湿地の保全再生』の最終事業でもある。

以下は、本シンポジウムに基調報告者として参加するユネスコ・ショルフハイデ・コリーン生物圏保護区のヘンネ理事長（Dr. Eberhard Henne）とのインタビューである。ヘンネ理事長は生物多様性の保全に係わる問題点を説明し、種の保存に向けた国際協力強化の重要性を強調した。



編集部：「生物多様性」は今では流行語となり、国民もマスコミも口にするようになりましたが、そもそも何を意味するのでしょうか。

ヘンネ：生物多様性は、気候変動と直接係わるものです。つまり「種の多様性」ということで、ウイルスやバクテリアを含むあらゆる種の遺伝子上の情報の多様性、生態系の多様性、生活圏の多様性を地球全体で、そしてまたそれぞれの地質学的な地域において保存することを指します。

編集部：生物の多様性に関する条約（CBD）がありますが、この条約はどんな点で新しいのでしょうか。

ヘンネ：従来は、野生生物をはじめ個々の種に関する条約しかありませんでした。CBDは種の多様性全体を網羅するもので、しかも地域や国に特定されるものではなく、地球上の生物の多様性を包括的に保全することを目指しています。締約国は現在187国および欧州連合（EU）で、これほど多数の参加を得た包括的な条約は、これまでに例がありません。

編集部：今、私たちが最初に取り組みなければならない課題は、なんでしょう。

ヘンネ：まず、気候変動がこれ以上進まないように全力を挙げなければなりません。それは、地球上の生物の多様性に最も大きく影響するのが気候変動だからです。しかも、影響を受ける生物の側に一定のプロセスがあるわけでもなく、とりわけ動物相においては勝ち組と負け組に分かれるでしょう。

編集部：具体的な例を教えてください。

ヘンネ：負け組の典型的な例がツルです。ツルの置かれる環境は、日本でもドイツでも同じです。ここ数年間でツルの数は増えました。ツルは浅い水のある湿った地域に生息します。しかし、そのような湖沼や湿地が干上がりつつあります。その結果、ツルの天敵が雛を襲いやすくなり、せつかくの繁殖も危機

に直面しています。世界各地で長年かけて保護しつづけてきたツルですが…

勝ち組に入るのがドクロメンガタスズメ（鱗膜面形雀蛾）です。これは、アフリカから飛来する蛾で、ヨーロッパでは二世代目が育ちませんでしたが、温暖化のお陰で二世代目も生き延びられるようになりました。

もうひとつの例として、ショルフハイデの例を挙げましょう。ショルフハイデ地域では、水が消えつつあります。気候変動だけがその原因ではありません。たとえば人間が水を追い遣りました。つまり、耕地を得るために湿原を干拓し、河川をまっすぐにして、湿地と切り離してしまったのです。そして、雨量が減った今では地下水面が毎年7センチメートルずつ下がっているのです。結果として植物相だけでなく動物相にも影響が及び、世代毎に種が減ってゆくのですね。

実は、私たちにも分からないことが多すぎます。だからこそドイツでは生物多様性に関する大型研究プロジェクトに着手したわけで、私たちはそのプロジェクトの三つの分野のひとつを担当しています。

編集部：ということは、CBDによって研究プロジェクトが増えたということでしょうか。研究のための資金が拠出されるようになったのですか。

ヘンネ：来年は、ボンでCBD締約国会議が開催されます。今お話した生物多様性に関する大型研究プロジェクトはボン会議の準備をするためのプロジェクトでもあり、十分な資金を得ております。しかし、通常の場合、公的資金は限られており、ショルフハイデのあるブランデンブルク州では自然保護のための予算がカットされているのが現状です。この研究でも、研究の成果を直接実行に移すこと、すなわち『自然保護と農業』といったプログラムや森林保全のためのプログラム——単式栽培から針広混合林へシフトさせるプログラム——につなぎ、持続可能性を得ることを目指しています。

編集部：持続可能性について、もう少し詳しく教えてください。

ヘンネ：持続可能性の定義はいろいろありますが、私自身は、具体的な事例を用いて特定の地域について論じることしかできないと考えます。最終的には、地域住民の生活に配慮したエコノミー（経済）とエコロジー（生態学）の関心の在り方、ということになるでしょうか。持続可能性のある措置は、5年経過した後も経済的に納得できるものであり、新たな害を呼び起こすことなく、常に自然環境と地域住民に配慮したものでなければなりません。

たとえば失われた種を復活させ、失われた地下水を再び飲用水として利用できるようにする湿地復元などが、持続可能性に優れた措置として挙げられるでしょう。

編集部：国際比較で見た場合にドイツの成績はどうでしょう。

ヘンネ：それほど悪くはありません。生物圏保護区に関してはドイツは世界一です。私は日本の事情は存じませんが、日本から視察に訪れた専門家の方がたは、私たちの活動にとっても感心しておられました。中国に行った折に私たちは、生物圏保護区を設けるためのパイオニア活動を行ないました。トルコでも、初の保護区が準備されています。こうした活動の優れた模範となるのが、100年以上前からナショナルパークを設けている米国です。

国際協力は必要不可欠です。生物圏保護区のワールドネットには、500以上の生物圏保護区が加盟しています。また、ユーロパーク・フェデレーションというものもあり、各セクションは緊密に協力しています。その他にもさまざまな協力関係があります。それぞれの国のレベルだけで努力しても大きな成果は得られません。国際協力を強化すること——これが、この15年間で得た教訓です。

## シンポジウム『アジアのメガシティ』とメガシティ研究の展望

大方潤一郎

東京大学工学系研究科都市工学専攻教授

2007年5月10日から12日にベルリン日独センターにおいてシンポジウム『アジアのメガシティ』（ベルリン日独センター、ドイツ・アジア研究会による共催）が開催された。筆者もベルリン日独センターの招待により、東京に関する報告者として参加する機会を得たので、ここに会議の概要を報告するとともに、今後のメガシティ研究についての展望を記しておくたい。



### シンポジウムの概要

会議は5月10日夕刻のテプファー氏（Prof. Dr. Klaus Töpfer）による基調講演から始まり、アジア地域における環境リスクの拡大と、その国境を越えた相互関係、持続可能な開発政策の重要性、アジアにおけるメガシティの問題に関する国際的研究の意義が強調された。

翌11日は、まず、クラス氏（Prof. Dr. Frauke Kraas）によりメガシティ研究の意義と比較研究の枠組みが提起され、珠江（川）／インド・マハラシュトラ州プネー（Pearl River-Pune）地域の広域的開発政策を具体的事例としつつ、インフォーマルな都市活動の実態を踏まえた政策立案の必要性が強調された。

ついで、筆者が世界最大のメガシティ東京に関する事例報告として、東京がどのようにして巨大都市圏を形成するにいたったかについて、その歴史的形成過程の概要と、近年の「都心回帰」の動向と背景について報告した。さらに11日午後はアジアのメガシティについての事例報告が行なわれた。

12日午前には、二つの分科会（ワークショップ）が並行して行なわれた。一方は不法移民問題を含む人口移動や社会的側面に着目した分科会、他方は都市計画・都市空間整備の方法論に着目した分科会である。その後、まとめのセッションとして各分科会報告と、総括討議が行なわれ、ハウスヴェデル氏（Dr. P. Christian Hauswedell）による総括が行なわれ閉会となった。

メガシティという主題の性質から話題は多岐にわたったが、各報告者に共通する論点としては、①従来の公式統計等による表層的分析を越えて都市社会・都市活動のインフォーマルな実態を把握すること、②インフォーマルな社会の実態を踏まえた実効性ある都市政策を立案すること、③ボトムアップ型の計画策定過程を可能にする方法、技術、政策を確立すること、の3点が強調された会議であったと概括できよう。

### メガシティ研究の意義

西暦2000年頃を境に、世界の人口の過半は都市人口となった。また、その多くは、巨大都市（メガシティ）に居住している。しかも今後、主に開発途上国において農村部から巨大都市への人口流入と、巨大都市内部での人口自然増により、メガシティはさらに急速に成長することが予想されている。

メガシティとは一般に人口500万人以上を要する都市圏を指す。国際連合人間居住計画（UN-Habitat）のデータによると、1985年時点では人口500万人以上の都市圏は世界に30しかなく、また人口1000万人以上の都市圏は東京、ニューヨーク、メキシコシティ、サンパウロ、上海、プエノスアイレス、ロスアンジェルス、大阪の8都市圏にすぎなかったが、2015年には、人口500万人以上の都市圏は60に倍増し（うち人口1000万人以上の都市圏は23）になることが予想されている。こうした新たなメガシティ（つまり30の都市圏）はすべてアジア、ラテンアメリカ、アフリカの都市圏である。

また、こうした新興メガシティの成長は、内発的な成長力によるものとは言い難く、農村部や中小都市圏から溢れ出た人口が流れ込み、いわゆるインフォーマル居住地が都市内部や縁辺部に拡大し、さらに、そうした地域での人口自然増が都市人口を巨大化させるという機制によるものであるから貧困問題、居住問題、公衆衛生問題、環境問題をはじめ、さまざまな都市問題を激化させることは明らかである。

欧米先進国では19世紀から1930年代にかけて都市化が進んだが、この過程で生じたさまざまな都市問題への対応として強固な都市計画体制を確立し、都市の郊外への拡大を適切に導くことを通じて居住問題、公衆衛生問題を一応乗り越えてきた経緯がある。しかしながら、こうした郊外化は、モータリゼーションと表裏一体のものであり、市街地の拡散とエネルギー多消費型のライフスタイルをもたらした。こうした都市形態は、環境問題の観点からは持続可能なものとはいえない。

したがって先進国では拡散した市街地を環境負荷の小さな形態に再編成することが目下の課題となっているわけである。

一方、現在急速に進行しているアジアや中南米、アフリカの新興メガシティの成長過程について、欧米先進国型の都市計画体制や都市整備手法（および、それが想定する都市形態モデル）を適用することは、第一に、欧米先進国型の高度なインフラ整備は現在の都市成長のスピードに追いつけないであろうこと、第二に、そうした不十分なインフラ整備状態のまま欧米先進国型の郊外化を推進することは環境問題はもちろん、さまざまな都市問題を一層、拡散・激化させ、制御不能な状態に陥ることが予想されることから、適切ではない。

したがって、われわれは新興メガシティの成長過程を適切に導き得る都市形態のモデルと、その実現・誘導の方法論、および制度を「発明」する必要がある。そうでなければ途上国の社会は崩壊し、また先進国も含め地球上の人類社会も崩壊することになる。ここに、メガシティ研究の重要性、緊急性がある。それは、従来の都市研究や都市計画技術の研究の枠組みを大きく超えた新たな研究領域であり、しかも、その目標は単に生起する現象を分析することではなく、いわば新たな文明を発明し実践することにあるから、人文社会科学の諸領域から工学的諸領域のあらゆる学術的方法論を総動員し、これらを統合的に扱わなければいけない課題である。

### 編集部注：

最終章『メガシティ研究に関する国際的学術交流の意義』を含む全文はベルリン日独センター・ウェブサイト（個別事業・事業日程・『アジアのメガシティ』）に掲載。

『日独高校生交流だけのコプログラム』で夢見た国へ  
メンツェル高等学校・日本語ワーキンググループ

本年2月17日から26日、メンツェル高等学校（ベルリン・ティアーガルテン地区）の生徒が日本への研修旅行を実施した。これは、日独の高校生同士の交流を支援し、青少年の相手国およびその文化に対する関心を促進する目的で2005年に設けられた『日独高校生交流だけのコプログラム』によって、実現したものである。本プログラムを提案し、資金を提供するのはダイムラー・クライスラー社および日本の同社系列企業三菱ふそうトラック・バス株式会社で、両社は年間10万ユーロを拠出している。『日独高校生交流だけのコプログラム』は、ベルリン日独センターが日独青少年交流を促進するために実施する六つのプログラムのひとつである。

以下は、メンツェル高等学校生徒の旅行記からの抜粋である。



2007年2月19日（月）——秋葉原から銀座へ

日本滞在一日目。最初の朝ご飯は和食と決めていたので、皆で吉野家に行った。そこから地下鉄で秋葉原へ。ここは、昔は「秋葉が原」、つまり「秋葉寺の原」と呼ばれていたらしいけれど、今では秋葉原、あるいは親しみを込めて「秋葉」と呼ばれている。技術の進歩とともに家電ショップが秋葉原に集まり、今では最新技術の集まる地区として賑わっている。

男子はもう大騒ぎで（マルクスはデジカメを買った）、もちろんメイド・カフェにも入った。「プリンが美味しいから」というのがその理由だった。ここで、マルクスが秋葉原に関するレポートを発表した（上の説明）。皆、真面目に話を聞いて、新しいことを一杯学んだ。それから少し自由時間になった。それぞれに秋葉原を回って、探検し、ショッピングして、楽しんだ。

秋葉原のつぎは皇居だった。1457年に建てられた江戸城は、今では天皇陛下の居城になっている。皇居の庭園はとても綺麗で、建築も面白かった。一時間ぐらいしてから銀座に行って、歌舞伎を観た。復讐と敵討ちをテーマとするとても人気のある出し物だったため、ほぼ満席の劇場で二時間過ごし、6時には外に出なければならなかった。それは、6時までのチケットしか買っていなかったからである。

お腹がグーグー鳴るのはホントに堪らない。加藤先生と男子がもんじゃ焼きとお好み焼きを食べにいかうと提案した。もんじゃ焼きというのは、サラダと魚介類をジュウジュウいう鉄板の上に乗せて、特別なソースを掛けて、そうすると全部くっつくので、フライ返しみたいな道具で掻き寄せる料理である。すっごく美味しかった！

2007年2月21日（水）——三菱ふそう、東京タワー、渋谷

東京三日目。朝早く、三菱ふそうトラック・バス株式会社のバスが迎えにきてくれた。今日も早稲田大学高等学院の生徒が一緒だった。今日のプログラムは、今回の旅行のスポンサーに会うこと。そのあとで東京タワーを見学して渋谷に行くことになっていた。

貸し切りバスというのは、カッコいい。ようやく着いたら、三菱ふそうのコミュニケーション・チーフとそのスタッフの人たちがとても丁寧に挨拶してくれた。最初に三菱ふそうと、その事業に関する説明があった。そして、トラックの開発に関する研修ビデオを観た。皆、三菱ふそうの技術と職場のチームワークに引き込まれた。それから工場を見学して、お昼ご飯に招待された。頭脳も胃袋も満たされて、東京タワーに向けて出発。しかも、三菱ふそうのバスで送ってもらえた。東京タワーの上から町を見下ろす。信じられないような眺めだった。ここでマキシムが東京タワーの構造とか建築に関するレポートを発表した。

そこから都バスで渋谷に。ここは自由行動で、思いっきり遊んでいいと言われたので、皆そうした。たとえばマコトとアキラはムスタファとジミーと一緒にゲーセンに行った。マキシム、ヴィンセント、マルクスはショウの友達と会って、セガ・センターに行った。マルクスはそこで一番乗りでポチューを買った。

7時にハチ公の像の前で集合。ハチ公の像というのは、ご主人が亡くなったあとも毎日駅まで出迎えに通った犬を記念する像だ。全員集まったところで近くのカラオケに入った。今日はものすごく楽しかった！楽しい以外の言葉を思いつけないほど楽しかった。

2007年2月24日（土）——早稲田大学高等学院

東京滞在六日目。ホスト学校の訪問。ドイツ語の授業をしているクラスに招かれて、とても温かい歓迎を受けた。結構話が通じた。ドイツ語の授業では48人の男子がークラスにいた。それでも、コミュニケーションは巧く成立した。たとえば早稲田の生徒に「Seid ihr müde?（疲れた?）」と聞かれて私たちは「はい、少し疲れた」と応えた。

お昼ご飯のあとに男子生徒が校内を案内してくれて、そのあとはそれぞれのホストファミリーの家に帰った。

2007年2月26日（月）——帰国

帰国の日。朝、上野に集合——午後6時には、ベルリンのテーゲル空港着。

やっと家族と再会。でも、ここは日本ではない。嬉しいのか、それともつぎの飛行機をチャーターして東京に飛んで帰りたいのか、皆どっちつかずの気持ちだった。

三菱ふそうトラック・バス株式会社、加藤先生、早稲田大学高等学院の生徒の皆さん、ホストファミリーの皆さん——私たちが東京に飛んで、楽しい日々を過ごせたのも皆様のおかげです。本当にありがとうございました！

メンツェル高等学校・日本語ワーキンググループのメンバー：マルクス・アボ（Markus Abo）、ヴィンセント・ボーレン（Vincent Bohlen）、ジミー・シートラ？（Jimmy Chytra）、ムスタファ・カラカ（Mustafa Karacar）、ベア・シュライバー（Bea Schreiber）、マキシム・スツェパンスキ（Maxim Szepansky）、タナン・ヴェトヴェロート（Thanan Wetwerot）。

下村豊ピエゾグラフィ展『見えざる月の論理』開会式、2007年4月27日

(展覧会は6月8日まで)。



2007年5月3日にベルリン日独センターで東京明星学園とベルリン第13高等学校(ベルリン・パンコウ地区)高校の合同コンサートが行なわれた。東京明星学園の合唱団は日本語、ドイツ語、英語で歌唱力を披露した。ベルリン第13高等学校は弦楽アンサンブルによるクラシック曲から、アカペラ合唱、ジャズバンドとつづく多彩なレパートリーを発表した。

東京明星学園合唱団は『日独高校生交流のためのプログラム』の支援を受け、2007年5月1日から1日までベルリンに滞在した。



写真左：ベルリン日独センターを訪れた日本のジャーナリスト(3月29日)。ドイツがG8議長国を務めたのを機会にドイツ連邦政府の招待を受けてベルリンとブリュッセルを視察旅行中に、ベルリン日独センターを訪問、ドイツ人ジャーナリストと歓談した。

第2回『キッズ・レクチャー』、2007年3月19日。

ベルリン日独センターは、センターの事業にベルリンの青少年を取り込み、日本に対する関心を喚起することを目指して、シリーズ『キッズ・レクチャー』を開始した。2回目の『キッズ・レクチャー』には、ベルリン第13高等学校(ベルリン・パンコウ地区)およびヒルデガルト・ヴェークシャイダ高等学校(ベルリン・グルーネヴァルト地区)で日本語の授業を受けている高校生が招待された。



写真上：2007年3月8日から11日にかけて東京と岡山で日独シンポジウムおよび専門家会議『日独介護保険の将来展望——介護保険制度・介護事業経営・介護を支える人材の現状と展望』を実施した。主催はベルリン日独センターおよび社団法人生活福祉研究機構、後援は厚生労働省、上智大学、他、協賛は特定非営利活動法人日本介護経営学会、他である。写真は基調報告者と主催機関関係者。

### 欧州連合（EU）／G8議長国—— グローバルな問題

国際会議『EU-Japan Cooperation in Science and Innovation（科学技術およびイノベーション分野における日本とEUの協力）』  
共催機関：欧州日本専門家協会、ミラノ大学  
開催予定日：2007年6月15日、ミラノ開催

会議『Security in Japan – New Dimensions and Understandings（日本における安全保障——新しい次元および理解）』  
共催機関：現代日本社会科学学会  
開催予定日：2007年11月22日～25日

シンポジウム『欧州連合（EU）における民間社会と政治意志決定プロセス』  
共催機関：国際交流基金（東京）  
開催予定日：2007年第4四半期

シンポジウム『日本とヨーロッパの50年間』  
共催機関：慶應義塾大学、在日EU委員会代表部（東京）  
開催予定日：2007年下半年、東京開催

### 天然資源とエネルギーの安定供給

シンポジウム『The New Central Asia Strategy of the EU（EUの新しい中央アジア戦略）』  
共催機関：ドイツ連邦外務省（ベルリン）、経済広報センター（東京）  
開催予定日：2007年7月9日、東京開催

国際会議『Resource Efficiency and Factor X: Japan and Germany at the Forefront（資源効率性とファクターX——最前線における日本とドイツ）』  
共催機関：ヴッパータール気候・環境・エネルギー研究所  
開催予定日：2007年秋

### 都市と都市環境

日独シンポジウム『日本とヨーロッパにおける生物の多様性と持続可能な開発』  
共催機関：東京大学21世紀COEプログラム『生物多様性・生態系再生研究拠点』  
開催予定日：第1部：7月5日（ベルリン開催）、第2部：2007年10月2日～6日（日本開催）

日欧シンポジウム『The Future of the Periphery – Forgotten Territories in Japan and Europe（日本とヨーロッパにおける忘れ去られた地域——辺境の未来）』  
共催機関：ドルトムント大学、財団法人計量計画研究所（IBS、東京）

開催予定日：2007年9月19日～21日

### 少子高齢化社会

日独シンポジウム『人生の秋に』  
開催予定日：2007年11月28日

### 構造改革とイノベーション

日独シンポジウム『地方分権のチャンスとリスク』  
共催機関：ハレ・ウィッテンベルク大学、早稲田大学  
開催予定日：2007年9月27日～28日  
東京開催

日独シンポジウム『テクノロジー・ロードマップとノレッジ・トランスファー』  
共催機関：ドイツ連邦教育研究省、ドイツ連邦経済技術省、ドイツ産業連盟  
開催予定日：2007年秋

### 国際競争における日独の企業

国際会議『How to achieve "Better Regulation"? Win-win Strategies by EU and Japanese Companies（「より優れた規制」を達成する方策——日本とEUの企業のウィンウィン戦略）』  
共催機関：ミュンヘン大学  
開催予定日：2007年下半年、ブリュッセル開催

会議『日独企業の対中国戦略』  
共催機関：デュッセルドルフ経済促進公社、デュッセルドルフ日本商工会議所  
開催予定日：2007年第4四半期、デュッセルドルフ開催

### 諸文化の対話

『第8回奨学生セミナー』  
共催機関：ドイツ学術交流会（ボン）  
開催予定日：2007年7月12日～13日

パネルディスカッションおよび式典『ベルリンの大学における日本研究120周年——日本とともに日本について語ろう』  
共催機関：ベルリン・ブランデンブルク学術アカデミー  
開催予定日：2007年10月15日

ワークショップ『グローバル化した世界における若者文化』  
共催機関：ライプツィヒ大学  
開催予定日：2007年10月31日

国際シンポジウム『諸文化の対話』  
共催機関：在日ドイツ大使館、東京大学  
開催予定日：2007年第4四半期、東京開催

ダーレム・ムジークアーベント  
（午後7時30分開演）

7月10日： 現代音楽  
10月10日： 現代音楽  
11月16日： タンゴのタベ（Cantango）  
12月14日： クリスマスコンサート

### 特別イベント

和太鼓演奏会  
共催機関：ベルリン独日協会  
開催予定日：2007年9月18日  
会場：ベルリン市庁舎大ホール

### 特別事業

『日独フォーラム第16回全体会議』  
開催予定日：10月2日～3日、東京開催

### 交流事業

『ヤングリーダーズ・フォーラム2007』の一環で開催する『サマースクール2007』  
共催機関：ロバート・ボッシュ財団、シュトゥットガルト  
2007年8月26日～9月5日、日本開催

『ジュニアエキスパート・エクスチェンジプログラム』  
共催機関：ドイツ連邦教育研究省、ドイツ連邦経済技術省、日本国外務省  
2007年6月21日～7月2日、ワークショップは6月30日

青年交流事業はホームページへ

### 科学技術賞

2006年度ベルリン日独センター科学技術賞授賞式  
共催機関：ベルリン日独センター友の会  
開催予定日：2007年6月29日

掲載の行事のタイトルが英語で挙げられているものは英語で開催、そのほかのものはドイツ語で開催（一部日独または日英の同時通訳付）します。

会場としては、ほかに記載のない場合はベルリン日独センターで開催します。

詳しくは  
<http://www.jdzb.de-->>各種行事



午後2時から

生け花のデモンストレーションと作品展示  
指圧デモンストレーション  
折り紙講座  
習字講座  
日本語体験講座  
書籍市（日本語書籍、日本関連ドイツ語書籍）  
図書室の展覧会『日本への道』  
屋台（寿司、天ぷら、蕎麦、飲み物）  
ワークショップ『マンガを描こう』  
ミニ講演会  
折り紙について  
日本の銭湯文化  
ベルリン日独センター青少年交流事業紹介

午後7時

内村浩介写真展  
『通りと人間模様——東京とベルリン』開会式

午後7時30分

『京都モデル』ジャズコンサート  
ライブチヒを中心に活躍するトリオのコンサート

※出し物等は一部変更することもあります。あらかじめご了承ください。

昨年のベルリン日独センター『一般公開の日』でワークショップ『マンガを描こう』を開催したところ、青少年を中心とする大勢の観客がつけかけ、熱心にマンガの描き方を学び、素晴らしい作品を仕上げた。そこで今回も続けて、本ワークショップを開催することとした。

ワークショップ講師はベルリン生まれのサン氏（Marie Sann）。10代の頃より数多くのマンガ賞を受賞してきた氏は、ノイクマン氏（Guido Neukamm）と共作で最初のマンガ本『Sketchbook Berlin』をトウキョウポップ出版から刊行。20代に入った現在は、フリーランサーのアーティストとして新しいプロジェクトに携わるかわら、グラフィック・デザイナーの資格取得に向けて勉強中である。

#### 内村浩介写真展

1984年に初めてベルリンを訪れる前に内村浩介氏が好んで撮ったのが東京をモチーフにした写真である。以来、氏は東京とベルリンのさまざまなシーンを撮りつづけ、両者を対峙させてきた。

「東京とベルリンを知れば知るほど、この二つの町に似通った点があるなど考えないのではないのでしょうか。でも私の目には、東京とベルリンは兄弟のように映るのです」（内村浩介）

本写真展は9月28日までベルリン日独センターで展示される。観覧時間は月曜日から木曜日の10時から17時、金曜日は10時から15時30分まで。

